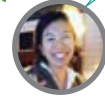


感想

都会で暮らした人たちが、田舎で暮らすことは、
田舎を活気づける大きな存在になるのでは。



デッケコルニル加奈子 さん

左京区在住
どろんこ 主催



南山城村、童仙房という集落は京都市から1時間半ほどで着きます。山道を抜けるとこじんまりとした美しく心地よい田舎風景と山の斜面を利用した茶畑が広がり、滋賀県、奈良県、三重県の3つの県が隣接しているところが魅力です。そういう地理的条件もあるのだと思いますが、外に向かって何かを発信されていたり、地元だけの付き合いではない交流を積極的にされています。

この村に移住をされた方は、生きていく上で「人との繋がり・自然と共に生きる術を知ること」を大事だと思っている方が多いです。」そして、お子さんがいらっしゃる方は、都会ではできない、自然の豊かさの中で子育てをしたいという思いを持っていらっしゃいます。毎日のご近所さんとの挨拶から始まり、農家さんからは季節の野菜、猟師さんからは鹿肉や猪肉のお裾分けを頂くことで自然との関わりを日常的に触れる。頂くだけでなく、助け合う精神がここでは培われます。子どもたちにも自然とそのような生き方が受け継がれていきます。

童仙房は明治初期に開拓された土地だからでしょうか、私の印象としては、ここでは代々続く昔からの習俗といったものがあまりなく、また、地元の方も移住者に対して大歓迎というよりは、ごく自然な事として受け入れられているようなので、移住者にとって自由さがあって住みやすいのではないのでしょうか。そして、ここにはアート・クラフト関係のお仕事をされている方が多く、田舎暮らしをしながら制作活動をされています。

田舎と言えど近所の方との繋がりがとても濃いです。一方、制作活動は一人の時間がとても多くなります。しかし、移住者の心掛け、村側の受け入れの心掛けのバランスがいいので、心地よく生活ができるのだと思います。最近では、町役場との連携が密になってきているので、昔よりは近所付き合いもスムーズになってきているようです。



子育てをされている方は、幼稚園・保育園・小学校や病院といった教育機関や施設の利用がとても限られています。そのなかでも、今ある教育機関だけに頼るのではなく、不足部分は自分たちで工夫されています。

移住者の清水のばらさんの「自分たちがどうやって暮らしていくかは、自分たちの責任のような気がします」という言葉が印象的でした。

これからは、都会で生活をしたことがあるからこそ、出てくるアイデアであったり、新しい生活スタイルが移住者からもっと発信されるような気がします。そういった発信できる方たちが都会と村の方を結びつけ、田舎を活気づける大事な存在になっていくと思いました。

